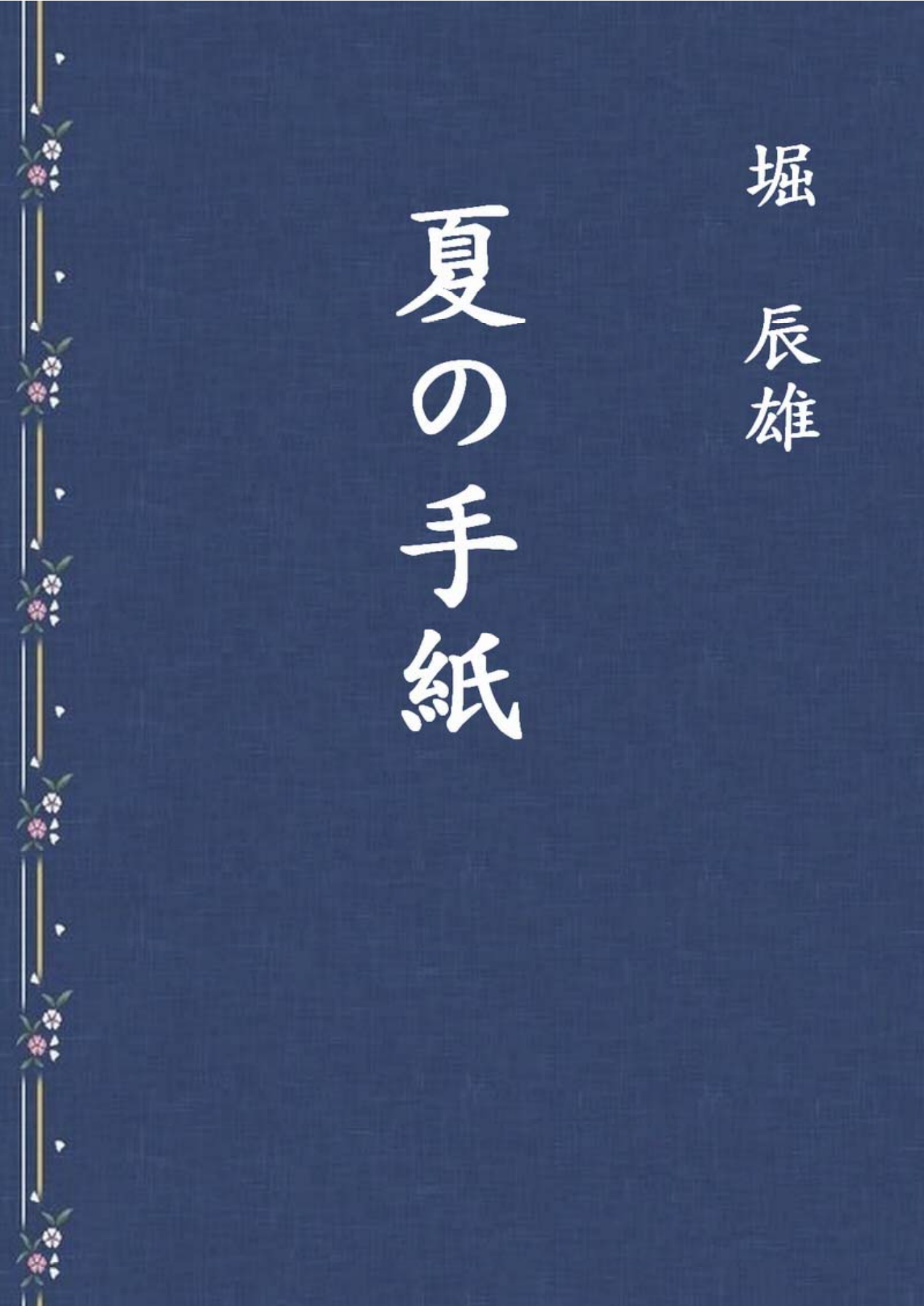


堀
辰雄

夏の手紙



夏 の 手 紙

立原道造に

七月二十五日、信濃追分にて

この前の土曜日にこちらに来るかと思っていたが、とうとう来られなかったね。君のいる大森の室生さんの留守宅の方へ手紙を出すと、どうも郵便物はみんな軽井沢の別荘の方へ廻送されてしまいうらしいから、君の働いている建築事務所宛にこの手紙を出すことにした。が、どうも軽井沢に建てるヒュツテの設計を頼む手紙でもあ
るのならいいが、君に詩集を貰ったお礼を書くんじゃない、

なんだか少し変な気がするね。

君の詩集（「萱わすれぐさ草に寄す」）、なかなか上出来也。こ
ういうものとしては先ず申分があるまい。何はあれ、わ
れわれの裡うちに遠い少年時代を蘇よみがえらせてくれるような、
静かな田舎暮らしなどで、一夏じゅうは十分に愉たのしめそ
うな本だ。しかしそれからすぐにまたわれわれに、その
田舎暮らしそのものとともに、忘られてしまう……そんな
な空しいような美しさのあるところが、かえって僕など
には *arrière-gout* がいい。

まあ、君の詩集のことは今はこのくらいにして置いて、

そのうちゆっくり批評をしよう。ただ一ことだけ言つて置きたい。君は好んで、君をいつも一ぱいに行っている云い知れぬ悲しみを歌っているが、君にあつて最もいいのは、その云い知れぬ悲しみそのものではなくして、むしろそれ自身としては他愛もないようなそんな悲しみを、それこそ大事に大事に行っている君の珍らしい心ばえなのだ。そういう君の純金の心をいつまでも大切に置いて置きたまえ。

*

この頃君の寄こす手紙は、そんな詩をいい気持で書いていた学生の頃とはだいぶ異って、すこし不安で苦しうのだが、そういう粗野な現実に辛抱づよく耐えている君の姿が手紙のうちにもだんだんしっかりして来るように見えるので、たいへん嬉しい。詩作などのことについては、見たら、ともかくも、そんな生活の上の助言などは僕にはとても出来そうもないからね。また、そういうものは、それ自身としてどんなに立派りっぱな助言だろうと、いかに空しいものか！——僕はこないだ京都に滞在してい

たとき、ある日、独逸^{ドイツ}文化研究所にO君を訪ねて行ったことがある。O君はまだ来ていられなかつたので、僕はしばらく大きな応接間で一人きり待たされていた。——僕はそこでぼんやりと煙草^{たばこ}を二三服したのち、何気なく傍^{かたわ}らの卓子の上に置いてあつた独逸の新聞の束を手にとつて、ばらばらとめくっていると、それへ毎号絵入小説を連載している作者の名前がどこかで見覚えのあるような気がしてきたが、そのうちその小説の第一回の冒頭にその作者のことが写真と共に小さく紹介してあるのを見ると、それはリルケがあ有名な手紙を書いて与えた

往年の若き詩人——フランツ・クサヴェア・カプスなんだ。あのカプスがいまはこんな絵入小説を書いているのか、と僕はしばらく自分自身の眼を疑った。が、まさしくカプスだ。もつとも、あの「若き詩人への手紙」の序文のなかで、カプス自身、生活のためにリルケが彼に踏みこませまいと気づかっていたような領域へいつか追いやられてしまっているのを嘆いていたことを読んで知ってはいたが、——そのカプスのその後の消息については僕は何も知らず、また何も知ろうとはせず、それきり世に知られぬ生活の中に埋もれてしまったのだらうくらい

に想像していた。そんな方がかえって、リルケにあんなに好い手紙を貰った若い詩人の悲劇らしく奥床しいと考えていたが、そのカプスがいまはこんな仕事をしているのか、と思うと、僕はそれを拾い読みして見ようなんていう好奇心すら起らず、ただなんだか胸の痛くなるような気がしたばかりだった。

そのうちにO君がようやく来たので、それを見せるとO君もそれを知らずにいて、一驚して読んでいたが、そんなカプスのことから僕たちの話はいつかリルケの方に移っていった。僕なんぞよりもずっとよくリルケを読ん

でいるO君にいろいろな話を聞いているうちに、自分のリルケの本といえはほとんど全部そこに置きっ放しにしてある山里の方が変になつかしくなつて、僕はなんだかこうやって京都や奈良をぶらぶら歩きまわっているのに一種の悔いに似た気もちさえ感ぜられてきて仕方がなかつた……

*

その山里に、こうしてまた、やっと帰つてきた訣わけだ。

毎夏のはじめにここの原野に群がって咲く、君の好きなユウスゲの花はぽつぽつと吹き出しているけれども、いつもそれに食い入るように入っていた君の静かな姿のそれと共に見えないのがどこやら物足りない。……すこし病気の野村英夫君はもう僕よりも先きに来ていて、僕を待ち侘^わびていた。しかし思ったより元気がよさそうだ。夕方、よく二人きりで、村はずれまで散歩に行く。この冬、わざわざ僕の頼んだ空気銃を自分で持って来てくれて、一しよに雪の深い林のなかを兎の足跡を追ったり、ここの村はずれで偶然僕たちの頭上に落ちてきた傷きずい

た雉子きじをつかまえて、それをその晩二人で面白半分食べてしまったことなど、そこいらの草の中に坐りながら、話し合ったりする。あれから間もなく病氣になったので、その祟りたただろうと僕がからかうと、獲とったのはいいんだけれど、あれを食べなければよかったんだと、野村君はすこし気まり悪そうに笑う。——その夕方も、また雉子の祟りか、野村君だけ蝨ぶよにやられて、足を腫はらして、すこし参ったような顔をしていたよ。

それから去年レムブラントの論文を書きに来ていたK君の友達で、M君というのが、今年はドラクロワの論文

を書きに来ている。やっぱり立派な画集をどっさり持って来ている。去年の夏はK君の持ってきていたレムブラントの画集を片っ端から自分の部屋へまで持って来て楽しんだが、この夏もひとつその流儀でドラクロワを楽しんでやろうかと、虫の好いことを考えている。

*

こんなことを書いていたら、あの去年の夏じゅう見て暮らしたレムブラントのさまざまな絵がはつきりと心に

蘇よみがえ ってきた。よく君たちが、緑の木蔭にねころんで喋舌しゃべ

り合っていた傍らに、僕だけ一人すこし離れて、やはり同じように寝ころびながら読んでいたモオリアツクの「蝮まむしのとぐろ」の幾つかの情景が、そのレムブラントの絵と混こんがらかり合いながら。……そう云えば、僕はまだ覚えている、シャルル・デュ・ボスがモオリアツク論の中でその「蝮のとぐろ」の結末の美しさを説くために引用していたフロマンタンのレムブラントの「善良なるサマリア人」についての批評を。——「もう日暮れだ。すべてのものは影の中であって、ただ、黄昏たそがれの単せ一いな静謐ひつ」

に領せられている画面の上をあちらこちらにと移動して
いるように見えるほど、いかにも移り易く、やす気まぐれに、
軽くそつと置かれてある、二三の微光がようえい揺曳しているの
みである。……」

そういった内部より発して、外部にまで輝やき出ずる
ところのレムブラント光線、そういった「揺曳する微光」
を、僕はそのモオリアツクの小説の中にもいかに愛して
いたか？ その「蝮のとぐろ」の恐ろしい主人公は、い
つも自分自身の外にばかりいて、彼の家族を苦しめ、憎
悪によってのみ生き、その憎悪の裡にうちのみ自分の存在の

意義を見出しながら老年に達する。——しかし、彼は遂にその憎悪にも死に遅れるほどいたく年老いて、ある日、目ざめる、彼が誤って自分はそんな人間だと信じ切っていたものから本当の自分自身に目ざめる。……

その最後の三章ほどの、レムブラントのある種の絵にそっくりなような、何とも云えずそうごん荘嚴な美しさ！ その夏じゅう、僕はそれにすっかり魅せられて、身の程知らずとはやっとなんかになって気がついたが、自分もそうだった何とも云えず美しいレムブラント光線をもったような、小説が書きたくて、毎日毎日、この村で自分の見聞

する乏しい材料を土台にして、いままでの僕の小説には似ても似つかぬような物語の筋を立てては、やがて力及ばざることを知って、自分から壊していた……

が、今の僕にはすぐにそんな小説が書けそうもなくて、まだすっかり諦^{あきら}め切った訣^{わけ}じゃないんだよ。そのうちにきつとそんなのも書いて見せる。どんなものを描くかはまだ一向見当がつかないが（しかしその小説の基調となるべき雰囲気はいま言ったようなものさ、——そういったようなものから一つの小説が次第に形をとりだすのを辛抱強く待っているのが僕の小説作法だ。これだ

けは君に白状してしまう) その物語の舞台は、誰に何と言われようとも、いま僕の住んでいるこのへんの山麓さんろくの小さな村、何度も何度もこれまで僕が自分の小説に使ったのと同じ村にするつもりだ。

*

きょう偶然に届いたモオリアツクの日記を手にとって見ていると、彼がその大部分の小説の舞台に使ったマラガアル地方の風景のことだの、それに対する彼の偏愛だ

の、また、その地方の実際の風景は小説のそれとはだいぶ異っていることだのを率直に語っている頁ペエジに出会った。そうしてそのどこへいっても葡萄畑の果てしなく続いて見せながら、何度自分はこの「夏がその熱を測量させる」平原を描いたか！ とモオリアツクは云う。ここかしこの屋根の上や葡萄畑の上の煌めききら、麻痺まひしたような沈黙、それらすべてのものは「それ自身」存在しているのだろうか？ 自分は自分の愛していた人たち、自分の発明した人たちを通してそれを見つめてばかりいたの

で、この風景は自分にとっては人間的な、余りにも人間的なものになってしまっている……。

「が、どうにもしようがない！ 私は敢^あえて自分の考えるところを言おう。——この風景こそは、自分の眼には世界中で一番美しいもの、生き生きとした、まるで同胞のようなもの、私の知っていることは何でも知っている唯一のもの、私がもう誰にも語ろうとはせぬ滅びた顔をもまだ覚えている唯一のもの、そうして夕方、酷熱の日の後などは、その風が神の被創造物の生氣のある、熱い呼吸でもあって、まるで母に抱かれてでもいるかのよ

うだ。おお、息づいている大地よ」

そういうフランスのマラガアル地方とは、およそ風景が異^{ちが}うが、この僕の（君はそれはまた私のですと言いたいところだろうね？）山麓の小さな村々について、前者におけるモオリアツクの場合と同様、それとそっくり同じようなことを僕は（恐らくは君もまた）どんなに言いたいだろう。

*

軽井沢へは数日前室生さんたちを迎えに行つたとき一遍行つたきりだ。あちらに一泊してきたが、いつものように早朝に起きると僕は一人でぶらっと桜の沢の林道の方へ散歩にいった。そうして僕は今年の夏になって始めて、例の、口笛くちぶえの嫌いな、すこし被害妄想狂の、しかし好人物らしいシュテルンベルク氏に出会つた。（君も知つているだろう。）去年とそっくり同じ姿で、相変わらず毛の茶がかった、小さな犬を引張つて、帽子もかぶらず、ステッキを突いて、すこし背中を曲げながら、とつとつと向うから歩いてきた。僕はなんだか気軽にお辞儀じぎでも

してちよつと好意を示したいような誘惑を感じながら、しかし黙ってそのまま、彼とすれちがおうとした矢先き、ふいとその老外人の連れている茶色の犬が頭に小さな怪我^がをしているのを見つけて思わず心持ち身をこごめながらその頭へ手をやって、

「怪我をしていますね？」と相手の顔を見上げながら、その言葉が通じようが通じまいが、構わずに口をきいた。はじめて口をきいたのである。

「……………?」シュテルンベルク氏は強そうな近視眼鏡^{けげん}越しに、しばらく怪訝^{けげん}そうに私の方を見つめていた。

「かあいそうに……」と私はそれから目をつとそらせて、今度はひとりごとのように言いながら、そのまま二人の間には何事もなかったような顔をして、その老外人と犬から離れて行った。そうして、数歩行き過ぎてから、ひよいと後をふり向いて見ると、老人はまださっきの姿勢のまま、私の方を、いかにも好意に充ちたような眼つきで見送っていた。

そう、私は君に言うのを忘れたが、シュテルンベルク先生は最近この桜の沢のずっと奥になる、「幸福の谷」(！)に住んでいるんだ。

*

それから僕はそのシュテルンベルク先生が昔住んでいた、村のずっと西方にある「匈奴ふんぬの森」のことを思い出して、つい遠いのでひさしくあの森の方へは行かなかつたが、今はどうなっているかしらと思つて、朝食後、朝あさ巳みちゃんを誘つて、一緒に自転車に乗って行つて見た。本当にひさしぶりでその森を見たが、ここもすこし昔とは変つた。その森の入口に近いところまで、日本人の新し

い別荘なんぞが出来ていて厭いやだった。しかしまだその森そのものは美しい。ともかくもまだ軽井沢には美しい森があるようだ。そんな森の中に、君に小さなヒュツテを建てて貰って、「喬きょう木林」や「晩夏」の中でボヘミヤ地方の美しい森を隅から隅まで描き尽したアダルベルト・シュティフテルのような物語でも書きながら、静かな晩年（昔から僕は自分の晩年として三十七八になった自分の姿を考えているのだ、なんだかすこし気が早いおうでおかしいけれど、そういう空想をも僕はしばしば楽しむ……）を送りたいとそんなことを僕に空想させるよ

うな、美しい森が、何とといったって、すこし奥深く行きさえすれば、まだまだ軽井沢にはあるようだ。

そう、もうこのへんで筆を置いた方がよかろう、詩集のお礼が、とんだものになってしまった。下らないことをいい気になって書いてしまったが、最後の森のなかのヒュツテの空想は、本当に偶然だが、いい思いつきだったな。これで、どうやらまあ建築事務所宛にこの手紙を出す口実が見つかったと云うようなもの。

日本文学電子図書館

「堀辰雄 日本の文学42」

著 者：堀 辰雄

制作者：宮澤一郎

出版社：中央公論社

昭和39年9月5日発行



日本文学電子図書館